

日本キリスト教団藤沢教会 2020年11月15日

申命記 18章15～22節、マタイによる福音書 5章38～48節

クリスマスに備え、昨日電飾の飾り付けが行われましたが、このコロナ禍ゆえ、今年のクリスマスが例年通りにはいかないことは誰の目にも明らかなことでしょう。しかし、たとえそうでも、クリスマスは、私たちにとっての大きな喜びです。ですから、そのためにも、しっかりとクリスマスに備えたいと思うのですが、ただ、それは、特別な何かをすることではありません。こうして礼拝を共にし、御言葉に聞きつつ、日一日とその日を待ち望むということでもありますが、ただし、その前に私たちにはしなければならぬことがあります。それは、この一年をしっかりと終えるということでもありますが、先週も申しましたように、それが悔い改めということです。そして、今日のイエス様のお言葉は、それがどうかを私たちに改めて思い起こさせてくれているように思います。

申命記の最初のところに「あなたの神、主はあなたの中から、あなたの同胞の中から、私のような預言者を立てられる」とあるように、その預言者とはつまり、私たちにとってそれはイエス様のことでもあります。それに続いて「あなたたちは彼に聞き従わなければならない」とあるように、私たちには、このようにお従いする方がすでに与えられているということです。それゆえ、この方と共に、私たちは今年も教会の歩みを終えることになるのですが、このことはつまり、神様は約束を違わず実現されるお方であるということです。それゆえ、私たちは、その神様とイエス様がお命じになることに素直に聞き従いたいと思うのです。それは、新しい年は、神様とイエス様にお従いするところから始まるからです。そこで、イエス様はその私たちに二つのことを命じます。その一つが、復讐してはならないということ、そして、もう一つが敵を愛し、迫害するもののために祈る

ということです。そして、この一年の終わりに際し、私たちはこの二つの事柄を自ら実行すべきこととして聞いているのですが、つまり、この二つの事柄は、私たちが心に留め、頑張りますと誓えさえすればそれですむ話ではないということです。そして、それは、今日の箇所の直前で、イエス様が「誓うことはまかり成らぬ。然り、然り、否、否と言いなさい」と仰っていることから分かります。ただ、イエス様のこの要求は、私たちを安心させるものではありません。なぜなら、終わりを迎えてつある今だからこそ、私たちはイエス様の仰ることの、その万に一つもできていない自分に気がつかされるからです。

そこで、私たちはイエス様への負い目のようなものを感じてしまうのですが、ただし、それは、私たちが聖書の御言葉を深く心に留めているからです。そこで私たちが思い起こすことが終末、つまり、イエス様が再臨されるその時、いわゆる、最後の審判と言われていることでもあります。それについて、十字架につく直前のイエス様が次のように語るのです。「そのとき、あなたがたは苦しみを受け、殺される。また、私の名のために、あなたがたはあらゆる民に憎まれる。その時、多くの人がつまづき、互いに裏切り、憎み合うようになる。偽預言者も大勢現れ、多くの人を惑わす。不法がはびこるので、多くの人々の愛が冷える。しかし、最後まで耐え忍ぶものは救われる。そして、御国の福音はあらゆる民への証しととして、全世界に宣べ伝えられる。それから終わりが来る」と。そのため、私たちは、この終わりという言葉を知ると、ドキッと、その先に進むことができない自分自身を予感させられもするのです。つまり、神様のふるいにかけて、自分は御国には入れないかもしれない、いや、絶対にそうに違いないと、この終わりという言葉

葉が私たちをしてそのように想像させるのです。

それゆえ、私たちは、このイエス様の要求を改めて自分事として聴いていくのですが、けれども、イエス様のここの言葉は、私たちが何度も聞き返さねばならないほどの難しい話ではありません。ですから、もし私がみくに幼稚園の子供たちにここの話をし、最後に、分かりましたかと尋ねたなら、ほとんどの子が大きな声で、「はい、分かりました」と応えてくれるに違いありません。このように、ここでイエス様の要求は、子どもたちにもよく分かるもので、しかも、分かるだけでなく、「はい」との信頼をもって応えてくれるに違いないものなのです。しかし、学校を卒業し、しばらくしてからの人たちはどうでしょうか。恐らくは、「はい、分かりました」との小気味いい返事はいただけないのではないのでしょうか。それは、求められる水準が余りにも高く、手が出せないと、多くの人がそう思うからです。そして、私たちの多くはそんな自分を納得させようとして、自分自身の説得を試みたりもするのですが、そこで口にする言葉が「子供だまし」ということであったり、「永遠の課題」ということであったり、できないだけでなく、しようもしない自分を庇うかのような説明を自分自身に向かってあれこれ語りかけることになるのです。そして、この「子供だまし」と言うことと、「永遠の課題」ということは、かつて私自身が自分に語りかけた言葉でもありました。

ただ、もちろん、それは、密やかにといいことであり、よしんば表に出たとしても、場を弁えて、ということではありましたが。しかし、場を弁えさえすればそれでいいかというところではありません。そもそもこのところ言えば、それで自分自身を説得し、納得させることなど、できることではないからです。ですから、そういう点で、私たちはどこかいつも負い目のようなものを感じることにものなるのですが、それは、自分自身を誤魔化していることを誰よりもよく分かっている

のが私たちであるからです。そこで、一つ皆さんにお尋ねするのですが、皆さんは、子どもの目をまっすぐに見て、ここのことを正直に、素直に、「イエス様はね」と話をすることができるでしょうか。あるいは、それは難しいなあと思ったとき、皆さんならどのような言葉で自分を説得し、納得させるのでしょうか。また、そうした試みに失敗したときの気持ちはどういうものであり、そこでどう振る舞うのでしょうか。

そこで、改めてイエス様がここで何を私たちに求めておられるのかを確かめたいのですが、そこでイエス様が、目には目をとばかりに、やられたらやり返したくなる私たちに先ず仰ることは、誰にも手向かってはならないということです。しかも、その要求の範囲は私たちの常識からすれば度を越えているとも言えるのですが、ただ、話はそれで終わりません。右の頬を打たれれば、左の頬をも差し出せ、身ぐるみ剥ぎ取ろうとする者には抵抗せず、全部与えよ、求めるものには求めるままに任せておけと、このように無理難題とも言えることを仰るのです。ただし、ここまでのことは、それをするしなないということだけが求められているわけですから、できるかできないか、するしないは兎も角として、「はいはい、分かりました」と生返事をして、体裁だけ整えれば、それですむ話でもあるのでしょうか。ところが、私たちの心根がそういうものであることをよくご存じだからとしか思えないのですが、その上で、イエス様はこう仰るのです。それが、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」との一言でありました。

私たちが人を愛し、ある人のことを思い、神様に懸命に祈りを捧げることができるのは、その相手との関係性がはっきりしているからです。ところが、イエス様は、関係性がこじれ、崩された、敵と見なす者を愛し、自分を深く傷つけ、貶める者のために祈れと命じるのです。それは、もちろん、敵対する者に尻尾を振って、迫害する者のために見せかけの祈りを献げよと、イエス様が仰っているわ

けではありません。愛するということは、その行為だけが問われているのではなく、その人のすべて、その人そのものが問われることだからです。それゆえ、それは口先だけですむ話ではありません。愛することは、全身全霊を相手に任せることであり、また、全身全霊をもってその相手を引き受けることでもあるからです。それが、十字架につかれたイエス様の、愛するということであり、それゆえ、そのように人を愛することのできる者が見せかけの祈りを献げることは本来あり得ない話でもあるのでしょうか。ただ、その前提としてあるのは、やはりその相手のことがよくよく分かっているということ、それゆえ、愛することも祈ることも、自分を偽ってできることではありません。

ですから、イエス様がここで仰っていることは、自分自身を偽り、はぐらかしてできることではありません。それゆえ、そのように自分を偽ってなしたことを、私たちは愛と呼ぶこともできませんし、また祈りと呼ぶこともできません。しかも、そもそもところで、私たちに敵対し、迫害する者にとっての私たちは、その相手からすれば、見えていない存在であるわけです。このことはつまり、私たちは、その相手のために愛し、祈る切っ掛けすらつかめないのが現実であるということです。けれども、イエス様は、そのような者をも愛し、祈れと命じられる。それは、イエス様が、敵である迫害する者のために、全身全霊をもって愛し、祈ることのできた方であるからです。そして、そのイエス様が間もなく終わりを迎えようとする私たちに、このようにご自分に強く従うよう求めているのです。それは、イエス様の私たちに向けられたその愛がそれだけ大きく強いからでもあります。ただ、それが大きく強過ぎるがゆえに、私たちは負担感を募らせたりもするのです。しかし、それは、私たちの誤解によるものです。

ですから、私たちは、この強さと大きさを誤解しないよう努めたいと思うのですが、それは、強いか弱いか、大きいか小さいか、いわゆる、徳の高さとか、人

品の高潔さとか、さらに言えば、選ばれるための基準とか、イエス様がここで強く私たちに求めておられることはそういうものではないからです。イエス様がここで私たちに求めておられることは、私たちの信仰のあり方であり、態度です。ただし、あり方、態度と言いましても、それは、心掛けがいいとか悪いとか、その立ち居振る舞いがふさわしいとかふさわしくないとか、そういうことではありません。イエス様が「敵を愛せよ」と仰ったその直後で、「悪人にも善人にも」と、また、「正しい者にも正しくない者にも」とこう仰るように、イエス様が私たちに強く求めるそのあり方は、私たち人間の物差しや、もちろん色眼鏡によって、推し量られるものではないからです。そもそものところで言えば、イエス様が仰るように、大きいか小さいか、高いか低いかを基準とするあり方は、私たちキリスト者だけが身につけているものではなく、神様を信じても信じなくても、一つのたしなみとして、世界中どこにでも認めることができるものだからです。

従って、イエス様がここで求めておられることは、人の思いの深さとか、気持ちの強さとか、そういうことではありません。しかし、私たちの多くは、もしかしたら、イエス様のお言葉をそのように受け取っていることはないでしょうか。しかも、イエス様は、今日の最後のところで、「だから、あなた方の天の父が完全であられるように、あなたがたも完全なものとなりなさい」とこうも仰っているのです。そのため、だから、私たちは「完全であらねば」と、自らを叱咤激励し、あるいはまた、自らを叱咤激励するように、人にも同じことを強く要求したりもするのでしょうか。しかも、イエス様は、「汝の敵を愛せ」と仰るその直後で、「あなた方が天の父の子となるためである」とこう仰っているわけです。つまり、イエス様のお父様である神様を、私たちがイエス様と同じように、アッバ、父よ、天のお父様と、そう呼べるようになるためには、この完全さを身につけねばということになり、そのため、この完全さに向かって、人は突き進むことにもなるの

でしょう。しかし、そうした試みは、残念ながら、これまで一度として成功したことはありません。なぜなら、どんなに完全なものを私たちが求めたとしても、この世のものはすべて未完成で終わるよう定められているからです。その理由は、私たちの罪にあるのですが、だから、新しい朝を迎えるために、私たちは罪を克服せねばという理屈に走ることにものなるのでしょうか。ただ、イエス様を除いたすべてが、その試みに失敗したわけですが、ところが、そのイエス様が神のような完全さを私たちに求めているのです。では、それができないと私たちはどうなってしまうのか。そこで、終わりを迎えたその時、私たちが見つめなければならないものがこの不完全なままで終わらねばならない自分自身でもあります。そのため、私たちは、不完全なままで終わらなければならないこの現実と戦うことにものなるのです。では、そこで戦う相手とは一体誰なのか。もしかしたら、その最大の敵は、もがき苦しむ自分自身に他ならないのかもしれませんが。ですから、そうした完全さの追求が、端から見れば、まるで独り相撲を取っているかのように思えるのはそのためです。

イエス様が仰る愛も祈りも、私たちが自分だけの力で行うことではありません。そこにはイエス様が必ずいてくださり、このイエス様の執り成しなくして、私たちは人を愛することも、人のために祈ることもできないのです。つまり、私たちの現す愛も、その祈りも、すべては主にあってということであり、それゆえ、主にあって愛す愛と、主にあって祈るその祈りはそもそもところで偽りのものとされることはありません。けれども、そこに私たちは自信が持てず、持てないためにまた、こうして終わりを予見させられるような時に、次は必ずと、来年こそまたと、神様に誓いを立てたりもするのです。それは、この乗り越えることとのできない現実を自力で乗り越えようとするからでもあります。またそこに、私たちの誤解があるように思うのです。

そして、この誤解とはつまり、私たちが神様とイエス様のことを自分から遠いところに見ているということです。できない、するしないということは、すべてこの誤解に基づいているとも言えるのですが、それは、子どもたちが、私たち大人のように考えず、イエス様の求めにも「はい分かりました」と元気よく素直に答え、そして、失敗しながら傷つきながら、イエス様の仰ることに懸命に従おうとすることからも分かります。それは、子どもたちが、イエス様と神様を自分の直ぐ近くに感じているからです。だから、子どもたちは、間違いと失敗だらけの自分自身を神様とイエス様に遠慮なく投げ出すことができるのです。そして、それは、イエス様が自分から離れないお方であることを、子どもたちがよく分かっているからでもあります。ただ、この無防備で、無思慮としか思えない決断をなさったのは、他でもない私たちの神様でもありました。そして、イエス様はこの神様の決断をここで完全と呼ぶのです。

ですから、終わりを迎えようとしているこの時、私たちがなすべきことはただ一つ、幼子のように神様に身を投げ出すことです。このことはつまり、できるかできないかを自分で判断しないということでもあります。イエス様がそれを私たちに強く求めているのは、その時、私たちがたった一人でその身を投げ出すものではないからです。その時、イエス様もまた私たちと一緒に神様の御前に進み出てくださいるのであり、ですから、私たちにとっての「終わり」は、神様の裁きのために備えられているものではありません。御国が完成へと向かう、そのための喜びの一步であり、共にあるイエス様を深く知る機会でもあるのです。それゆえ、一つの終わりを迎つつある私たちは、この無謀とも思えるイエス様の勧めを深く心に留めたいと思うのです。それは、それを私たちが実際に行うなら、私たちはそこで間違いなく、共にあるイエス様をその目で、その体で、その心で感じることになるからです。祈りましょう。